

【資料】 知事十二年を振り返って

奥田， 八二

<https://hdl.handle.net/2324/7388899>

出版情報：奥田八二日記研究会会報．15， pp.182-183， 2025-09-30．奥田八二日記研究会(九州大学大学
文書館内)

バージョン：

権利関係：



【資 料】

知事十二年を振り返って

奥田 八二

世論調査で、無党派層が急増したと指摘される今日、私は、これも不思議とは思わない。戦後五十年、大学で三十八年、行政で十二年歩んできた私だが、今も意識は常人に近いほどいいと思っている。福岡県知事一期は特に異様な雰囲気の中に置かれた。野党が仕掛ける知事攻撃、対応に苦慮する私及び与党、とくに県政と縁遠い事案についての腹立たしさは忘れられない。これら攻撃役を演じた人達と、今は何の心の隔りもなく話はできる。「党の方針だったもんね」と笑って言う人もある。だったら、この人達も根は常人であるに違いない。

民主主義、議会制民主主義、政党など、太陽や空気のように感じている人は多いようだが、とんでもない。片や何十億年、片や百年、長くて二百年、後者は前者にくらべ、超可変的なものである。

議会のことはさて置き、当面の行政では総論賛成・各論反対に一番困る。とくに迷惑施設といわれようが、対処は不可避のものがある。犯人を扱う所、廃棄物を扱う所、河川・港湾・道路の工事などである。「私権」をかざして「通せんぼ」する人がある。広域公共産業廃棄物処理場建設計画が一人の反対で用地取得で躓き、到る所で不法投棄が発生し、原因は官の怠慢との指弾をうけるに至る。

首長は毎日忙しく、週休二日制で日程は更に過密になる。祝賀の儀式に出席して祝辞をのべるのもいいが、限度がなくなる方向に進む。そうした県民との接触の中でホッとするのは、ごく通常の形での生産者・生活者・運動団体の人達と現場で語り合える時である。人間がみえ、生きざまがみえ、地域が見え、教えられるのである。ブルことなく、ありのままがわかる。何の理屈もいらない。そして人のぬくもりや希望が体得できる。自分の視野が開け、理論や思想、利害や党派と別の世界に遊べる。有難い限りと思ったことが何度あっただろう。

しかし、よく考えてみると、こうした公職に在ると、終始、自己を捨てなければならない。別世界に遊べるのもいいが、それも公務である。私人としての時間が切り捨てられていく。親族や昔の友人との交流は疎になり、礼を失する痛みをどれ程感じたことか。机辺は紙片の山となり、別世界にいた事に気づき、もう元に戻れないという心配が強まってくる。「捨てて行け」という気持と「戻るしかない」という気持が交錯する。やはり故郷に戻ろう、私を取り戻そう、一年余り前に、その選択をしたわけである

知事選出馬の時は多くの人の意見をきいた。しかし、次は出馬せぬとの決定は誰の意見

もきかなかった。出馬決定は遅目に、辞退の決意は早目に表に出した。

思い返すと、知事十二年の体験はすべて宝の山といえる。捨て難い、忘れ難い、二度と得難い、何ものにも換え難い宝が詰まっている。

前福岡県知事

（S19 年卒）

※『九州大学経済学部同窓会報』第 21 号（1996 年 4 月 5 日）より転載。奥田八二日記の 1996 年 1 月 21 日（本誌第 14 号に掲載）に下記の記述があり、九州大学経済学部同窓会事務局に照会し、同窓会報の提供を受けたものである。

1 月 21 日（日）曇

賀状のおかえしを書いたが二〇枚ほど。明日の上京について秘書室の橋本氏に連絡したら、東京事務所であれこれ対応してくれるよう返事がかえってきて、ホッとした。総務長官室に行くのにチェックアウトされてしまうと困ってしまうからである。経済学部同窓会報への寄稿をたのまれていたのでこれを仕上げた。知事「12 年をふりかえって」ということで一二〇〇字、割合にすらすらと書けた。こうして一日がすぐ暮れてしまって一月はあと何もせず終ってしまいそうだ。但し、何かせねばならぬと思わぬことにしている。